

## 賀茂季鷹の書写活動

—『定家卿五十首詠草』を中心に—

金子英和

### 要旨

賀茂季鷹は江戸中後期の藏書家・文化人である。現在、京都市歴史資料館には、季鷹の藏書を核とする賀茂季鷹関係典籍類（個人蔵）が寄託保管されている。本稿は、同資料群に収められている藤原定家『御室五十首』草稿の一伝本である『定家卿五十首詠草』（以下、京歴本）に注目し、諸本と季鷹の書写活動について論じたものである。

定家草稿は春部のみの自筆本（個人蔵）。早稲田大学中央図書館保管。以下、早大本）、安政四（一八五七）年に原本を謄写したという五〇首全体の写本（書陵部蔵。以下、書陵部本）、書写年代不明の写本（東京大学総合図書館蔵。以下、東大本）の三本が知られていた。本文を比較した結果、京歴本は東大本に近い一本であることが分かった。

京歴本の奥書を分析し、某人・高階経和・森尹祥・季鷹と書写が重ねられたことを明らかにした。季鷹と尹祥の交流はすでに知られているが、最初期の交流を示すことに京歴本の価値が認められる。両者の交流のきっかけは、三島自寛による可能性が考えられる。また、交流が継続した背景には、季鷹自身の藏書形成という目的があつたと推測する。

さらに、奥書から季鷹の仮名の定義が現在のそれと異なること、見返し裏の反故紙や内部徴証から季鷹の書写方針は字母まで正確に親本を転写する所謂「不違一字書写」ではないこと、資料や書写時期によって書写方針の変遷が想定されることを指摘した。



## 一、はじめに

賀茂季鷹は、宝暦四（一七五四）年に生まれ天保一二（一八四一）年に没した、上賀茂社官人にして文化人である。その経歴と活動に関しては高橋「1954」、盛田「1998」A・B、盛田「1999」ほか、多くの先行研究がある。略歴を記せば、明和二（一七六五）年、有栖川家諸大夫となり、職仁親王・織仁親王に和歌を学ぶ。明和九（一七七二）年から寛政三（一七九一）年まで、すなわち一九歳から三八歳まで江戸下向。下向当初のよりどころは職仁親王和歌門人の三島自寛と見られている。その後、荷田御風の門人となり、加藤千蔭らとも交流し古学の造詣を深めて行く。季鷹は堂上・地下歌人を結ぶ存在として活躍した。寛政三（一七九一）年以降は京に戻り、上賀茂に歌仙堂を立て、和漢数千巻の蔵書を擁した。現在、季鷹の蔵書を核とする資料群が京都市歴史資料館に賀茂季鷹関係典籍類として寄託保管（個人蔵。京都市指定文化財）されており、インターネット上で画像公開が進んでいる。

さて、稿者は仁和寺の和歌活動に研究的興味を抱いており、特に近時は『御室五十首』の藤原定家草稿を重点的に調査している。『御室五十首』は守覚法親王が建久八（一一九七）年頃に発企した定数歌で、構成は四季（春一二首、夏七首、秋一二首、冬七首）雑（祝二首、述懐三首、閑居二首、旅三首、眺望二首）である。仁和寺僧・公家歌人一七人が参加したが、参加歌人の一人、定家には草稿が残っているのである。

定家草稿の伝本を紹介年次順に挙げると、五〇首および紙背評語が揃う東京大学総合図書館蔵本（以下、東大本）

①、五〇首および紙背評語が揃う宮内庁書陵部蔵本（以下、書陵部本）<sup>②</sup>がある。その後、戦前の入札目録に図版が掲載されていた春部一二首分の自筆草稿断簡<sup>③</sup>が出現し、現在は早稲田大学中央図書館に保管されている（以下、早大本）<sup>④</sup>。令和三（二〇二二）年、稿者は早大本について和歌文学会大会において報告を行った<sup>⑤</sup>が、該本調査過程で賀茂季鷹関係典籍類に『定家卿五十首詠草』（二〇箱三九一）の外題を持つ定家草稿の一伝本が含まれていることを知った（以下、京歴本）。京歴本は自筆原本の再現性という点では書陵部本に譲るところがあるが、定家草稿の伝来・書写の整理や季鷹の書写活動に関して示唆に富む資料である。そこで、本稿では、京歴本について書誌的な検討を行い、定家草稿の伝来・書写の整理や季鷹の書写活動について論じていきたい。

## 二、定家自筆草稿と伝本

定家自筆草稿と伝本の書誌的報告を行う。

### I. 「定家自筆春部草稿」（個人蔵） Ⅱ 早大本

一首二行書き。装丁…掛軸装。書写年代…建久九（一一九八）年頃。数量…一軸。料紙…楮紙。本紙寸法…縦三〇・〇糎、横五一・五糎。軸寸法…縦一一・二糎、横五三・〇糎。外題…「京極中納言詠歌（自筆御室五〇首）」表具…一文字風帯・白地竹屋町、中・萌黄竹屋町、上下・茶地竹屋町。軸先…象牙。箱など…外から、黒漆塗台差箱・縹色絹本袋（定家十二首掛物／并行空添翰一軸 数地」と墨書）・更紗袋・生漆台差箱。備考…左右合点、除棄号などあり。紙背に添削評語あり。天正三（一五七五）年に掛軸に改装されるに際して作成された臨写本が付属する（九条植通加証奥書付き）。

### Ⅱ. 『軸物之和歌寫』 Ⅱ 東大本

### Ⅲ. 『京極黄門詠五十首』 書陵部本

一首一行書き。二面七行、二一行。装丁…袋綴装。書写年代…江戸中後期。数量…一冊。「享保十四（巳酉）年於洞庭象（天）覧之後詠之詩哥」「大猷院殿上洛御道記」「海道記」と合冊。料紙…楮紙。寸法…縦二・三・六糎、横一・六・〇糎。丁数…全三五丁、遊紙一丁。表紙…本体は藍無地表紙（資料保護のため、洋書風のハードカバーで本体を閉じる。西洋紙による遊紙、前後に一枚ずつあり）。外題…「軸物之和歌」と表紙左上に題簽に墨書。内題…「（新古今之時代）和歌五十二首（軸物之写有点批判書）」（一丁才）。巻首題…「軸物之和歌寫」（一丁ウ）。奥書…「終五十二首已 五月四日寫之畢 墨付六枚」。備考…五〇首すべてが書写される。本来紙背に書かれていた評語を詠歌の行間に朱で書き入れる。左右合点、朱丸点など有り。

一首二行書き。装丁…卷子装。書写年代…安政四（一八五七）年。数量…一軸。料紙…細川紙。寸法…表紙、縦三・二・〇糎。横三・八・四糎。本紙、全長五一・〇・五糎。兼築「1982」Bによれば、和歌本文が二五・一・五糎。評語部分が二二・五・五糎。奥書が一・六・一糎。表紙…茄子紺布表紙（後装）。見返し…奉書（原装）。奥書…「右京極黄門自詠自筆五十首和哥 御点并裡書者 後鳥羽院帝宸筆之由古筆所申也 茲時安政四（一八五七）年膺廿日依 仰影寫之訖（原卷薩摩殿藏也） 山田常典」。備考…五〇首すべてが書写される。書写面も自筆草稿に酷似し、原本全体の姿を再現できる資料。本来紙背に書かれていた評語を五十首歌に続けて本紙おもてに朱で書く。左右合点、除葉号など有り。なお、『国書総目録』では「定家卿五十首」の題で彰考館旧蔵本（『彰考館図書目録』（大正七（一九一八）年）四五七頁、已部歌書「定家卿五十首 藤原定家詠 一 一五 写」）が掲載され、書陵部本を参照する指示が出る。彰考館旧蔵本は『館本出所考』によれば、板垣宗憺が元禄七（一六九四）年に田村右京大夫（一関藩主田村宗顕）本を書写したものである。ただし、同本は焼失資料であるため、『御室五十首』草稿か厳密には断定できない。書陵部本画像情報：DOI：10.20730/100003491

IV. 『定家卿五十首詠草』（個人蔵） 〓京歴本

一首一行書き。一面八行×九行。装丁…袋綴装。書写年代…天明三（一七八三）年、賀茂季鷹写。数量…一冊。料紙…楮紙。寸法…縦二二・六糎、横一四・三糎。丁数…全六丁。表紙…淡梔子色無地表紙。外題…「定家卿五十首詠草」。奥書…後述。請求番号…二〇箱三九一。備考…五〇首すべてが書写される。合点、朱丸点、書入れなどあり。京歴本画像情報…DOI : 10.20730/100291383

自筆草稿の特徴は左右合点と紙背評語である。この合点や、東大本の特徴である朱丸点の意味合いは、書陵部本をもとに兼築「1983」が論じており、それによれば、右合点は採用歌を表す定家の合点、左合点は第三者によって及第歌に付けられた合点である。また東大本朱丸点は定稿にない詠歌を示す後代の人物による点である（以下、草稿特有歌朱丸点）。紙背評語の作者については、俊成・寂蓮らの見解があるが、本稿ではこの問題には立ち入らない。

京歴本にも右左合点があり、東大本に見える朱丸点がある。左右合点の書写はやや不正確で、合点を欠くところがある。そのほか、四箇所、和歌本文右に朱丸点が付く。続いて京歴本の特徴を述べると、①位置書きが「参議藤原朝臣定家」となる（建久九（一一八八）年時、定家は左近衛権少将）、②雑部構成が独自、③草稿特有歌朱丸点の存在によって東大本と近い関係が窺われるが、字母や漢字仮名の使い分けは合致しない、④見返しに誤写した夏部半丁を張り付けている（見返し裏夏部反故紙）、などの特徴がある。このうち、③以下は、後節で検討を加える。

以上、諸本の書誌情報を押さえた。それぞれの特徴をまとめると、【表1】のとおりである。次節から諸本の関係を検討し、続いて季鷹の活動に論点を移していく。

【表1】 諸本対応表

## 三、諸本の関係

先述のとおり、京歴本は草稿特有歌朱丸点を有することによって、東大本と近い関係にあることが窺われる。本節では草稿特有歌朱丸点と除棄号によって諸本の書承関係を検討する。

春五番歌に注目する。諸本の比較表を【表2】に挙げた。早大本は除棄号が上句と下句にそれぞれ付く【図1】。一方、書陵部本は、上句の除棄号は正確に書写されているが、下句は「つゆく水に」の部分に傍線のように付く【図2】。東大本は下句に上句の除棄号が付き、さらに下句の除棄号は「つゆく」の部分に傍線のように付く【図3】。このことから書陵部本と東大本は直接ではないにしても、近い関係にあることがわかる。以上を令和三(二〇二二)年和歌文学会大会で指摘した。今回、再検討するに及び、東大本について、本来歌のはじめに付いている草稿特

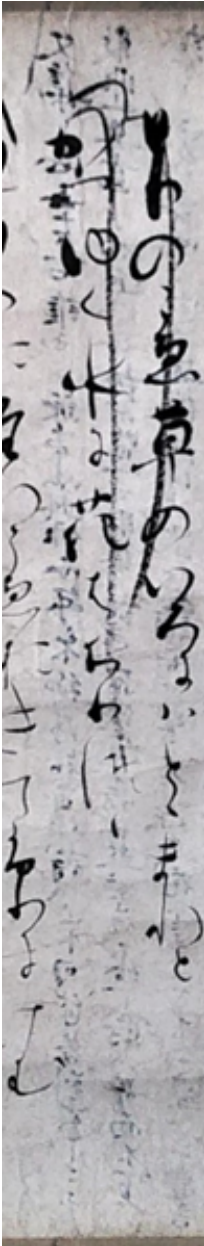
京歴本	東大本	書陵部本	早大本	
五〇首	五〇首	五〇首	一二首	歌数
一七八三年	江戸後期	一八五七年	一九八八頃	書写年次
袋綴	袋綴	卷子	掛軸	形態
一首二行	一首二行	一首二行	一首二行	書き様
無	傍記 朱で和歌に	続く 和歌本文に	有	裏書
有	有	有	有	徐棄号
有	有	有	有	右合点
右合点として書写	有	有	有	左合点
有	有	無	無	草稿特有歌朱丸点
右朱丸点あり				その他
藤本・万波 〔2007〕	A・B 久保田〔1967〕	兼筑〔1982〕	佐藤〔1979〕	紹介

有歌朱丸点が、下句のはじめに付いていることの重要性に気が付いた。実は、同様の特徴が、京歴本にも見えるのである（【図4】）。

【表2】春五番歌諸本比較表

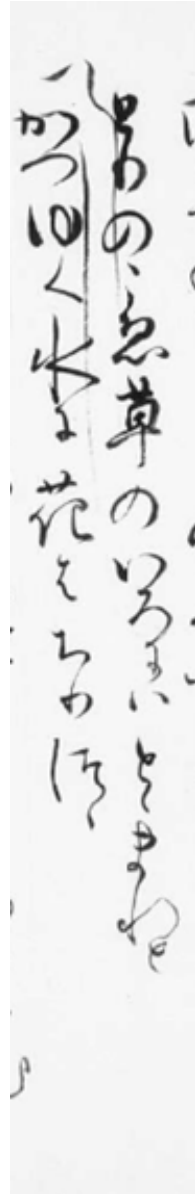
早大本	とりのごゑ草のいろにはとゝまれと かつゆく水に花はちりつゝ
書陵部本	とりのごゑ草のいろにはとゝまれと かつゆく水に花はちりつゝ
東大本	とりのごゑ草のいろにはとゝまれと○へかつゆく水に花はちりつゝ
京歴本	鳥のごゑ草の色にはとゝまれと○へかつ行水に花はちりつゝ

【図1】早大本（画像には色調補正・トリミング処理など加工を施している）

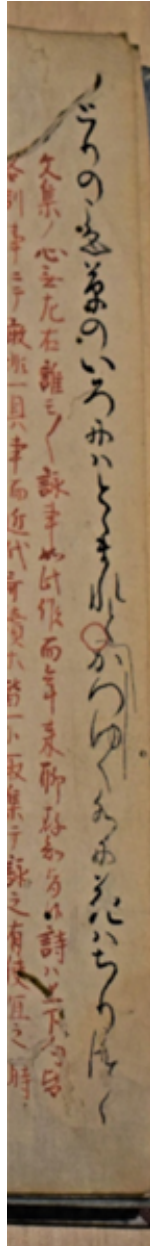




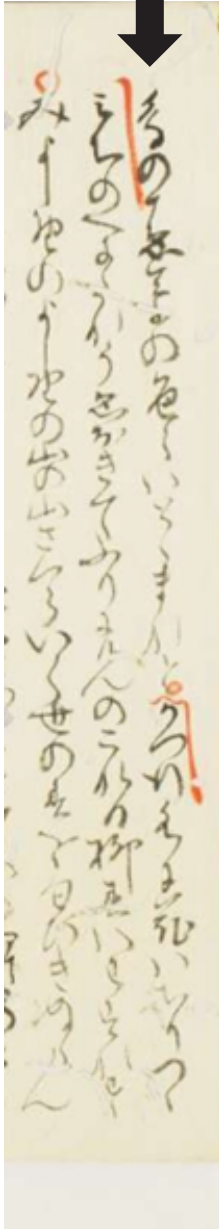
【図2】 書陵部本（画像には色調補正・トリミング処理など加工を施している）



【図3】 東大本（画像には色調補正・トリミング処理など加工を施している）



【図4】 京歴本（画像には色調補正・トリミング処理など加工を施している）



京歴本は、除棄号は一つしか付いていないが、草稿特有歌朱丸点が下句のはじめに付いている。おそらく京歴本・

東大本は、一首二行書きで草稿特有歌朱丸点が付いていた伝本Xの系統と史料される。春五番歌の場合、草稿特有歌朱丸点は下句寄りに付けられていたのである。そのため、一首一行書きで書かれた際に、位置を誤り付されたのである。さらに言えば、京歴本と東大本が同様の誤写をするからには、草稿特有歌朱丸点が下句の直接上に付いていたか、伝本Xの書写として一首一行書きで草稿特有歌朱丸点を持つ伝本Yがあったかと思われる。ただし、草稿特有歌朱丸点は本来下句に付くものではないので、該点が下句の直上に付くとは考え難い。したがって、京歴本・東大本は、一首一行書きで草稿特有歌朱丸点を持つ伝本Yの写本であつたと考察する。なお、京歴本の雑部は独自構成を取り、諸本と比べると次の構成上の異同がある。

『拾遺愚草』	祝	（二首）	述懷	（三首）	閑居	（二首）	旅	（三首）	眺望	（二首）
書陵部本	祝	（二首）	旅	（三首）	閑居	（二首）	述懷	（三首）	眺望	（二首）
東大本	祝	（二首）	旅	（三首）	閑居	（二首）	述懷	（三首）	眺望	（二首）
京歴本	眺望	（二首）	旅	（三首）	閑居	（二首）	述懷	（三首）	祝	（二首）

これが京歴本書写時に起こったものか、それ以前に起こったものかは不明である。また、この異同が意図的なものか、錯簡のような物理的なものか、現存資料の限りでは判断が付かない。後考を俟つ。

次に奥書に注目していきたい。奥書は四種に分かれる。便宜的にA～D奥書とし、翻刻する（句読点私意）。

A 本云／右五十首和歌者、定家卿四十歳／之時之詠歌也。裏之詞者、俊成卿也。両卿「以自筆一軸今書写之。

世上「有／之一卷也云々。

B 右一軸者、武州於江戸求之。毛頭不誤／書写之。可秘々々。／元禄十四辛巳二月日 高階曲肱「軒」

C 天明二年仲冬上旬、於燈下令模書之畢。」源尹祥

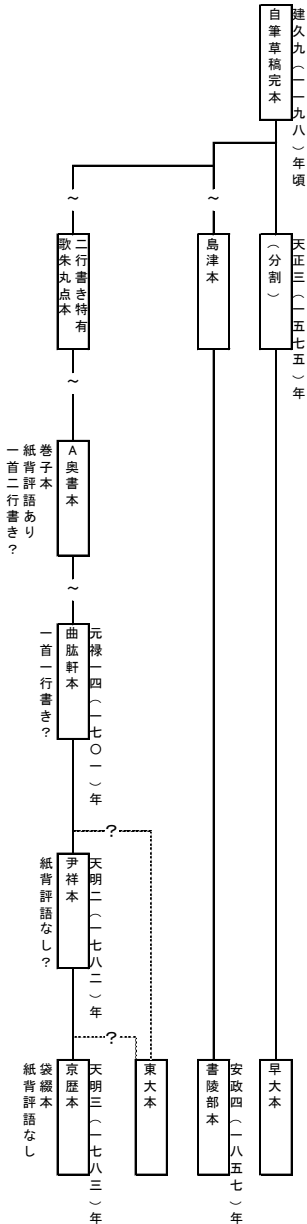
D 右模書之一冊、自尹祥子令借書／写畢。但如前書。雖正本仮字甚誤。／仍改正之畢。尤旅衣きならの山を／

きなれの山と有。然暫随本書而已。／天明三庚卯<sup>⑥</sup>九月廿四日賀茂「季鷹」

本奥書のA奥書は、誰の手になる奥書か不明である。A奥書の時点では、卷子本で、紙背評語も書写されている。当該奥書に拠ればその評語の作者は俊成と極められた。原本の形態を留めていたものであろう。一首二行書きの書写面や、原本の筆跡も再現していた可能性がある。B奥書では元禄一四（一七〇二）年に高階曲肱軒なる人物が、江戸で定家草稿模写本を求め書写、C奥書では天明二（一七八二）年一月上旬に源尹祥が曲肱軒本を書写、D奥書では翌三（一七八三）年九月に季鷹が書写したとある（それぞれの人物については次節で検討する）。

このように考えると、東大本は曲肱軒本か尹祥本を親本（いずれかが伝本Yの可能性もある）とするものと見ることもできる。以上より、系統樹は【図5】のとおりとなる。

【図5】系統樹



#### 四、奥書に見る人的交流

本節以降は季鷹の書写活動に注目していく。はじめに、京歴本奥書から看取できる人的交流について検討する。B・C奥書の高階曲肱軒と源尹祥から検討を進める。

高階曲肱軒であるが、曲肱軒は辞典類にその名は見えないため、一般的には誰か知られていないのではないだろうか。しかし先に結論を述べれば、寛文一二（一六七二）年～元文元（一七三六）年にかけて活動した書家・高階経和と見てよい。関係著作に『高階経和聞書』があり、本書から元禄一三（一七〇〇）年に経和が持明院基時の説を受けたことが分かる。このことは、尹祥との関係を掴むうえで注目に値する。

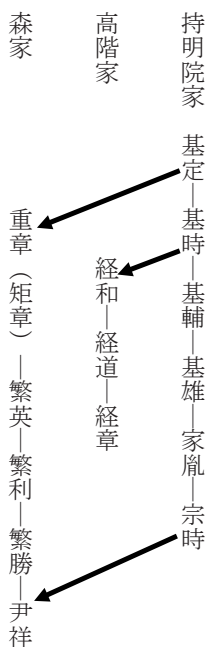
尹祥は元文五（一七四〇）年～寛政一〇（一七九八）年にかけて活躍した持明院流の書道家の森尹祥である。四代前の重章が持明院基定門に入った関係から持明院と縁が深く、尹祥も天明元（一七八一）年に持明院宗時門下に入ったことが知られている<sup>7)</sup>。

続いて曲肱軒と尹祥の交流を確認する。次掲は早稲田大学中央図書館蔵『瀟湘八景詩歌』奥書<sup>8)</sup>である。

右一卷持明院大納言基時卿／以直筆写之者也／元禄十三年二月廿五日」高階曲肱軒流静／於京都書之／a 経  
「花押」 這十二月花鳥和歌巻物書／寫之時以一筆書之法也当家／令相傳者天明六年正月廿二日於／b 貞臣朝  
臣亭令焼失雖然同本／高階氏（c 即師高階傳次郎息／同孫三郎）為所持之間得借用／同四月三日凌病苦令再  
写畢／源尹祥誌之

ほぼ同様の奥書を持つ『瀟湘八景詩歌』が国文研にも蔵されており<sup>9)</sup>、国文研本はa…径、b…お玉ヶ池<sup>10)</sup>、c（傍記）…ナシ、の異同を持つ。当該奥書によって、天明六（一七八六）年に尹祥が高階孫三郎から曲肱軒書写の『瀟湘八景詩歌』を借覧し書写した旨が確認できる。高階孫三郎は『寛政重修諸家譜』により高階経章の通

称であることが知られるが、さらに尹祥男公風による『世尊寺代々伝書』跋文によつて、尹祥が、経和の蔵書を嫡男経道から借り受けたことが知られる。これにより尹祥が交流を持った高階氏は同門の書家の高階氏であり、曲肱軒は経和であることが知られるのである。三家の関係を示せば、次のとおりとなる。矢印が師弟関係を表す。



続いてC・D奥書の尹祥と季鷹の検討を進めるが、その前に京歴本が季鷹真筆本であることを指摘しておく。D奥書は「右模書之一冊自尹祥子令借書写畢…」となっており、誰かに書写させたように読める。そのためか、藤本・万波「2007」では京歴本を季鷹真筆本（当該目録では自筆本と称している）としていない。季鷹関係典籍類のうち、『隣女集』（三三八。文化六（一八〇九）年一二月書写）は奥書に「真精僧都にうつさせ」とあることから門人に書写させた資料であることは間違いなく、季鷹蔵書のすべてが季鷹真筆本ということではないのは事実である。しかし、京歴本の奥書筆跡は本文筆跡と同一と見え、『隣女集』本文とは筆跡は異なる。藤本・万波「2007」が季鷹真筆本としている書籍は二四点あるが、そのうち『山乃霞』（六六）・『讃岐典侍日記』（八五）・『松浦物語』（八七）などと京歴本は明らかに同筆である。また季鷹は京歴本と同日に『辛崎松乃記』（三五六）・『慕京集』と合冊）を書写しているが、これとも同筆である。奥書の「令」については、試みに国文研古典籍総合目録データベースで用例を探せば、「借用せしめ書写されし」と読むことができる例がある<sup>11</sup>。京歴本も同様に、「借らしめ書写し畢んぬ」と読むべきだろう。つまり、京歴本は、とある人物を仲介にして尹祥書写本を借覧し、天

明三（一七八三）年九月二四日に自ら書写した資料である。

次に季鷹と尹祥の交流について考察を施す。両者の交流に関わる論に、一戸「2014」がある。同論では関西大学中村幸彦文庫蔵『季鷹家集』の寛政元（一七八九）年条により季鷹が尹祥家歌会に出詠していたこと、セリチユリ文化財団蔵『懐紙以下書法 色紙式』奥書によって、天明七（一七八七）年には季鷹が尹祥から入木道書物を借りていたことが指摘されている<sup>(12)</sup>。しかし、管見の限りでは、京歴本こそが両者の最初の交流を示す資料となる。

さて、一戸は入木道書の分析であり、尹祥の入木道の求心力を説く一例として、季鷹との交流に触れている。すなわち一戸は、『懐紙以下書法 色紙式』の「右一卷森尹祥子よりかりえてうつしおく物也／天明七年九月廿五日 賀茂季鷹」との奥書を挙げ、

入木道書の借覧などもしていたごとくである。季鷹自身、江戸の地にあつて「有栖川宮御作法」なる和歌書法の伝授を行っていた形跡があり、その作法は持明院流入木道并に二条家歌学と符合するものであると主張していたようである

と指摘するのである。稿者はこの記述を、季鷹に入木道の関心があつて交流が継続したとの見方が示されているものと理解する。一方、最初期の交流を示す京歴本はあくまで文学資料であつて、尹祥の入木道の影響力のほかに、季鷹が自身の和歌蔵書の形成のため尹祥との親交を深めた可能性も検討していく必要がある。

季鷹と尹祥の交流は遅くとも天明三（一七八三）年には始まっていた。では両者を結び付けたのは誰だったのか。その人物を直接示す資料はない。しかし丸山「1959」所引の無窮会蔵『古学家伝稿』は、この問題に関して示唆に富む資料と言える。同書は、季鷹の江戸での活動を支えていたとされる三島自寛が、持明院宗時の郢曲の門人であつたことを伝えているのである<sup>(13)</sup>。

自寛は俗名を景雄と言い、通称を吉兵衛と言う。徳川家御服御用を務めた。一節において有栖川職仁親王和歌門人と述べたが、その根拠は書陵部『入木門人帖』（マ高130）二コマ目に「三嶋吉兵衛」の名があることである。これにより宝暦八（一七五八）年七月一六日に職仁親王の和歌の門人となつてゐることが、丸山「1959」・盛田「1999」などで指摘されている。安永八（一七七九）年八月に角田川扇合を主催し、季鷹らが参加した。稿者は自寛が持明院家の郢曲の門人となつたことを伝える一次資料には接触できていないが、自寛が宗時門下であれば、同門の尹祥と交流を持ったと考えることができる。そして、このことにより季鷹と尹祥の交流のきっかけには自寛がいた可能性が十分に想定できるのである。尤も、季鷹と尹祥の交流が先に形成され、その縁で自寛も尹祥と面識を得て持明院門下になつた可能性もあるが、長らく江戸に住んでいた自寛より先に季鷹が尹祥と関係を結ぶとは考え難く、自寛が仲介となつたとするのが最も蓋然性の高い見方である。

以上、本節では奥書を起点に京歴本成立に至る人的交流を整理し、尹祥との交流に和歌蔵書の形成という可能性があること、彼との交流の媒介者として三島自寛が想定できることを述べた。また、論述の過程で京歴本が季鷹真筆本であることも確認した。次節では、D奥書から伺える季鷹の仮名遣い定義について論じる。

## 五、季鷹の仮名遣い定義

先行研究の理解を確認する。季鷹の仮名遣い定義に言及した論に関本「2021」がある。同論は、寛政期の校合本『苔の衣』（五二）をもとに季鷹の校訂方針について論じたものである。関本は今野「2017」を援用し、季鷹の「仮名遣い」に関しては、今野真二氏が『正誤仮名遣』について「清音濁音ということが「仮名遣い」に含まれているようにみえる。これは現代考えられている「仮名遣い」という枠組みとは一致しない」と

指摘することを押さえる必要がある

と述べる。しかし、今野の指摘は季鷹『正誤仮名遣』を六〇年ほど後に増補した鶴峯戊申『増補正誤仮名遣』（弘化四（一八四七）年）に対する指摘であって、季鷹の仮名遣いに対するものではない。また、季鷹は清濁を分かつことが多いが、京歴本には濁点は施されない。この点から見ると、少なくとも天明三（一七八三）年の段階では季鷹の言う「仮名遣い」に清音濁音は含まれていないと見るべきだろう。ただし、季鷹の仮名遣いの定義は確かに現代のそれとはずれる点があるように見える。それが京歴本奥書の「但如前書。雖正本仮字甚誤。／仍改正之畢。尤旅衣きならの山を／きなれの山と有。然暫随本書而已。」の部分である。京歴本は契沖仮名遣いに校訂された本文なので、奥書で言うところの仮字の改正とはそうした校訂を指すものと理解できる。その一方で、季鷹は「きなれの山」に疑問を示しており、文脈上、これも仮字の誤りの一種と季鷹は位置付けていたと読める。では、「きならのやま」は季鷹の書写活動においてどのような意義を持つのだろうか。「きならのやま」の用例は『万葉集』に、

恋衣コヒゴロモ 著櫓キナラノ乃山ヤマニ 鳴鳥ナクトリノ之 間無マナクトキナシ時無 吾恋ワレコフ良苦ラクハ者  
こひごろも きならのやまに なくとりの まなくときなし あがこふらくは

（万葉集・卷一二・三〇八八・寄物陳思）

があり、同歌は『五代集歌枕』に、

きなれの山 着櫓山

こひごろもきなれの山に鳴く鳥のまなしときなしわがこふらんは （五代集歌枕・五二〇）

と採られる。さらに『夫木抄』は「きなれの山、着櫓、大和」と立項し、同歌ほか家隆「洞院摂政家百首」（八八二三・八八二四）を採る。「櫓」の表記から、「きなれのやま」は『万葉集』では「きならのやま」と詠まれ



ていたことが分かる。上代語に範をとる契沖仮名遣いを採用した季鷹にしてみれば、「きならのやま」が正しい語であったのである。関本「2021」は季鷹校訂本『苔の衣』の分析を通し、

季鷹の解釈・判断の方針と実際を知ることによって、季鷹の『苔の衣』校合時の興味関心は、「古典成立時の本文の正しい姿」よりも「いにしへの形而上の正しい語のすがた」を追究しようとするところにあることが見えてきた

と述べる。「形而上の正しい語のすがた」の義については稿者の理解が及んでいないが、上代語を範として本文を校訂しようとする京歴本の姿勢は、関本の指摘に通じるところがある。ただし、重要な点は、季鷹が該本を完全に校訂しなかったという点である。これは尹祥本を「正本」(D奥書)と判断した結果であり、院政期以来の「きなれのやま」の用例の定着や定家の語の理解などをも尊重したためであろう。尤も、「きならのやま」と「正しい仮名」を書入れることもできたはずである。書入れを行わない方針は、『苔の衣』などの書写方針とは一線を画す。このことは、季鷹の書写方針が、親本の性質(正本か否か)や活動時期によって変化変遷を遂げている可能性を示している。

以上、本節では奥書に注目し、季鷹の仮名遣い定義について論じた。また、書写方針に変遷がある可能性を指摘した。次節では書写方針について考究を重ねる。

## 六、京歴本の書写方針

季鷹の蔵書は便宜的に大別すれば季鷹真筆本(京歴本など)・季鷹購入本(『苔の衣』など)・門人などに書写させた言わば季鷹監督写本(『玄玄集』三六七、真精僧都書写など)で形成されるが、蔵書の多くに共通する特徴と

して、関本「2021」は①契沖仮名遣いに仮名遣いを修正する、②濁点を付ける、③頭注を施す、④校合を行う、を挙げる。さらに同論では『苔の衣』の書き入れが三度にわたって行われていたことを指摘する。これらの特徴が季鷹の安永年間から文化年間まで至る書写活動に一貫して見られるのかは、季鷹研究をするうえでは重要な疑問である。京歴本の書写方針を明らかにしつつ、この疑問について考えたい。

京歴本は、右①は確認できるが、②③④は確認できない。さらに見返し裏夏部反故紙に注目し、検討を重ねる。次に翻刻文を挙げる。

夏 七首

更衣

隔つるけふ立かふる夏衣ころもまたへぬ花の名残を

雑夏 六首

たか為に鳴や五月の夕とて山時鳥猶またるらん

山端に月もまち出ぬなこりとて花橘を風の吹らん

これに対し、本紙夏部は次のとおりである。

夏 七首

更衣

へたてつるけふぬきかふる夏衣ころもまたへぬ花の名こりを

雑夏 六首

／＼ たか為に鳴や五月の夕とて山時鳥猶またるらん

／＼ 山端に月もまち出ぬ夜を重ね猶雲のほる五月雨の空

／タくれはいつれの雲の名残とて花橘を風のふくらん

反故紙は、夏三番歌の下句を書くべきところを夏四番歌の下句を誤写してしまったため、反故にして見返しに貼り付けたものと思われる。反故紙からは次のことが指摘できる。

a 本紙夏部一番歌二句目は独自本文であるが、見返し本文は通行本文である。この部分は親本の独自異文ではなく季鷹の誤写によるものと考えられる。

b 夏部本文と見返し本文を比べると、漢字を開いていたり、その逆もあったりする。このことから季鷹の書写態度は、いわゆる「不違一字書写」という方針ではなかったと考えられる。

c 合点や傍記など、朱書きされる部分は見返し本文には見当たらない。これらは本文書写の後、まとめて記される方針だったのだろう。つまり季鷹は段階的に書写を行っていると考えられる。

関本論では、季鷹が恣意的に校訂するため、校訂資料となった本の本文の再現は困難であるとするが、bの書写態度から、親本の字母水準の本文の復元も困難であると言わざるを得ない。またcの書写態度から、京歴本も本文書写↓合点などの書入れ、と段階的に書写が行われたものと推測される。さて京歴本には濁点が見られないが、これは段階的書写の結果、濁点を付す機会がなかったという可能性が挙がる。先述のとおり、季鷹は京歴本書写日に『辛崎松乃記』を書写しており、一日ではその書写も限界がある。では紙背評語がないことも段階的書写が理由なのだろうか。京歴本は行間が狭く、東大本のように行間に書写する余裕がない。つまり紙背評語を書くとする姿勢が窺われないのである。京歴本に紙背評語が書写されない背景に、親本に紙背評語がなかったためか、季鷹の方針であったかは現時点では判然としないが、段階的な書写態度が理由であった可能性はひとまず措いておいてよいと思われる。

次に書写方針の考究の一環として、京歴本の右朱丸点の意義について検討する。右朱丸点が打たれるのは春

一二番歌「行くへ」、冬二番歌「おかぬ」、冬六番歌「雪をれ」、述懐二番歌「行方」の四箇所である。右朱丸点は季鷹藏書に時々見られるもので、『弁内侍日記』（八六）『賀茂保憲女集』（三八五）『苔の衣』などにある。ただしその意味合いはつかみがたく、一定の意図によって付けられたものとも断じがたい。ただし、京歴本は、四つの右朱丸点の傾向として、述懐二番歌を除き、定家仮名遣いと契沖仮名遣いの問題が起る箇所に右朱丸点が打たれていることに気づく。また述懐二番歌も、bの書写態度により、本来ひらがなで書かれていた部分を漢字交じりに書写してしまった可能性もあり、右朱丸点は、いずれも仮名遣いに関する点と考えられる。

引き続き右朱丸点の検討を重ね、季鷹の書写活動についても考察を施したい。定家草稿諸本・定家自筆『拾遺愚草』・定家『下官集』・季鷹『正誤仮名遣』の語句の表記を一覧にすると【表3】のとおりである<sup>(14)</sup>。

【表3】 仮名遣い比較表

	京歴本	早大本・書陵部本	定家自筆『拾遺愚草』	『下官集』	『正誤仮名遣』
春一二	行へ <sup>○</sup> なく	ゆくゑなく	(ゆくゑ) <sup>(15)</sup>	ゆくゑ	ゆくへ
冬二	しはしも <sup>○</sup> おかぬ	しはしもをかぬ	しはしもをかぬ	をくつゆ	おく
冬六	雪を <sup>○</sup> れに	雪をれに	雪をれに		(をる) <sup>(16)</sup>
述懐二	行方 <sup>○</sup> よ	ゆくゑよ	ゆくゑよ	ゆくゑ	ゆくへ

述べたとおり、書写本の仮名遣いを契沖仮名遣いに修正することは季鷹書写本には一般的に見られることで、朱丸点は一見すると、契沖仮名遣いに修正した箇所を表すもの、と考えられそうである。しかし、京歴本奥書によれば仮名の誤りは甚だ多かったという。そのため、わずか四箇所を修正箇所を「甚だ」と表現することには疑問を覚える。むしろ、この四箇所が契沖仮名遣いに適合する箇所だった、と考えるべきであろう（となれば、尹

祥本は、表記に揺れがあった、ということになる)。季鷹によって修正されることのなかった、非修正箇所と言すべき部分である。

こうした京歴本の契沖仮名遣い部分と右朱丸点を手掛かりにして、親本の仮名遣いはある程度推測できるのではない。なぜならば、関本は『苔の衣』季鷹校訂本について、同本は季鷹が重要と判断した部分のみ校合本の本文を反映し、そのため校合本のすべての本文を採るわけではないと指摘するが、京歴本には校合の跡は見えず、右朱丸点も仮名遣いに関するものと判断できる。そのうえ、季鷹は、仮名遣いの修正に関しては季鷹関係典籍類を見る限り極めて厳密に行っており、右朱丸点の記入漏れはないものと考えられるからである。

さて、京歴本は尹祥本の仮名遣いを変更し、親本の仮名遣いは保存しない。しかし、非修正箇所を右朱丸点で示すことにより、親本の仮名遣い状況の再現の手がかりを残す。一方で、安永年間や寛政年間では、親本の仮名遣いをひとまずそのまま書写し朱で〈正しい仮名遣い〉を加えることによって、親本の仮名遣いを保存する資料が多くなる。このことは、季鷹の書写態度に揺れがあることを示している。すなわち、京歴本書写時には〈正しい仮名遣い〉で本文を伝えることに注力し、それ以降は、書写校訂の作業過程を保存し、親本の仮名遣いを遺しつつ〈正しい仮名遣い〉の本文を後代に残すという方針に書写方針が変わったと考えられる。季鷹の書写方針は一貫したものではなく時代的に変遷するさまが見て取れる。京歴本はそうした季鷹の活動を捉えるうえで意義のある資料と評価できる。

以上、本節では、季鷹の書写方針が「不違一字書写」ではなかったこと、書写・書入れは段階的に行うものであったこと、書写方針には時代的に変遷が想定されることを指摘した。

## 七、おわりに

本稿では賀茂季鷹関係典籍類の一書、『定家卿五十首詠草』に注目し、伝本の整理と季鷹の活動について考察を施した。当該資料は自筆原本の再現性という点には書陵部本に譲るが、季鷹の書写活動の実態を把握するうえで示唆に富む資料と言える。当該資料を通して季鷹の書写方針には変遷があることが想定された。今後の課題は、個々の作品の書写・書入れの方針の検討を行いつつ、巨視的な視点でその方針に傾向を見出していくことである。

さて、検討過程で改めて感じるのは季鷹の契沖仮名遣いへのこだわりである。もともと堂上の歌人であった季鷹にとって、契沖仮名遣いへの傾倒は転向とも言えることである。なぜ季鷹にこのようなこだわりが生まれたのか、実は未だ明らかにされていない。また、季鷹と尹祥は見てきたように資料の借覧や歌会への出席などの交流が確認できるが、仮名遣いの点では折り合いがつかない場面もあったと推察される。季鷹の契沖仮名遣いに対するこだわりがなぜ生まれ、それが雅文壇の中でどのような意味を持ったのかという疑問も今後の課題としたい。

### 〔注〕

- (1) 紹介と考察は、久保田「1967」A・B。
- (2) 紹介と考察は、兼築「1982」A・B、兼築「1983」。
- (3) 佐藤「1979」で『神野家並某家所蔵品入札売立目録』（昭和八（一九三三）年）の図版が紹介された。
- (4) このほか、久保田「1967」A・Bで井上侯爵家入札目録に冬部の断簡が掲載されていることが指摘されたと、兼築「1982」Aで書陵部本との比較により偽筆と確定した。本稿では考察の対象から外す。
- (5) 令和三（二〇二一）年度和歌文学会大会「藤原定家自筆『御室五十首』春部草稿と守覚法親王添卷の再出現」。

- (6) 正しくは癸卯。
- (7) 尹祥の経歴については大道「1943」・鈴木「1989」。
- (8) 「花鳥十二月和歌」と合冊。請求番号：〈01-01608〉。早稲田大学中央図書館HPで画像が閲覧できる。  
[https://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he01/he01\\_01608/index.html](https://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he01/he01_01608/index.html)
- (9) 国文研田安徳川家旧蔵本。外題「十二月花鳥和歌」。金子・海野「2020」に解題がある。国文研HPで画像が閲覧できる。DOI：10.20730/20023816
- (10) 貞臣は横瀬貞臣か。享保一八（一七三三）年〜寛政一二（一八〇〇）年。高家であった。和歌を善くす。冷泉家門人。江戸切絵図では、お玉ヶ池近辺に横瀬美濃守（貞臣孫、貞固か）の名が見える。当該奥書の語るところは、尹祥が相伝していた『十二月花鳥和歌』は天明六（一七八六）年正月二日に貞臣亭で焼失した（貞臣に貸与していたものか）。そのため、高階孫三郎から曲肱軒書写本を借用し同年四月三日に書写したという。同書は曲肱軒の比定だけではなく尹祥の交友圈を明らかにする点でも意義のある資料と言えよう。
- (11) 金城学院図書館蔵『為妙心院日法追悼／昌陸千句抄』奥書。DOI：10.20730/100108902
- (12) 同書は賀茂季鷹関係典籍類『持明院家色紙式』（二二八）と同一内容か。『持明院家色紙式』は国文研HPで画像が閲覧できる。DOI：10.20730/100250206
- (13) 持明院家が郢曲も善くしたことは、小野「1992」A・Bなどに指摘がある。
- (14) 当該表を見ると、定家草稿はいわゆる定家仮名遣いで表記されているように思われるが、実際はそうではない。坂本「2020」では、書陵部本からは定家草稿は定家仮名遣いが徹底されていないことが指摘されており、定家草稿は定家仮名遣い成立以前の資料と考えられている。
- (15) 春一二番は草稿特有歌のため、『拾遺愚草』には採録されない。そのため（ ）で示す。

（16）『正誤仮名遣』では「雪をれ」の語が採録されない。アクセントは異なるが、参考として「をる（折る）」を示した。

《参考文献》

- 一戸渉「2014」「近世入木道書の生成と伝播…センチュリー文化財団蔵『松平定信旧蔵入木道書一式』弘法大師書流系図」とその周辺、『斯道文庫論集』49
- 大道寒溪「1943」「持明院家に誓約状を遺す人々」、『美術・工芸』17
- 小野恭靖「1992」A「持明院基規小考—持明院家蔵書目録という窓から」、『藝能史研究』116
- 小野恭靖「1992」B「持明院基規考—室町時代後期一郢曲伝承者の肖像」、井上宗雄編『中世和歌—資料と論考』明治書院
- 金子馨・海野圭介「2020」「国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書解題（持明院家篇）」、『調査研究報告』40
- 兼築信行「1982」A「宮内庁書陵部蔵『京極黄門詠五十首和歌』—『軸物之和歌写』の原巻を復元する—」、『国文学研究』77
- 兼築信行「1982」B「〈影印〉宮内庁書陵部蔵『京極黄門詠五十首和歌』」、『研究と資料』7
- 兼築信行「1983」「藤原定家『御室五十首』草稿について」、『国文学研究』79
- 久保田淳「1967」A「『御室五十首』について（上）—俊成・定家・家隆を中心に—」、『国語と国文学』44
- 5—久保田淳「1973」「新古今歌人の研究」、『東京大学出版会』
- 久保田淳「1967」B「『御室五十首』について（下）—俊成・定家・家隆を中心に—」、『国語と国文学』44



— 6 ↓久保田淳「1973」『新古今歌人の研究』、東京大学出版会

今野真二「2016」『古言梯』に連なる仮名遣書、『仮名遣書論改』、和泉書院

坂本清恵「2020」『御子左家歴世と仮名用法—俊成・定家・為家そして為相—』、『日本文学研究ジャーナル』  
16

佐藤恒雄「1979」『定家御室五十首の草稿「春之歌十二首」—『軸物之和歌写』の原本をめぐって』、『香川大

学教育学部研究報告（第1部）』47 ↓佐藤恒雄「2001」『藤原定家研究』、風間書房

鈴木淳「1989」『幕府書道師範森尹祥の書学』、『書誌学月報』40 ↓鈴木淳「1997」『江戸和学論考』、ひ  
つじ書房

関本真乃「2021」『苔の衣』に見る賀茂季鷹の物語校正活動、『北海学園大学人文論集』70

高橋貞一「1954」『賀茂季鷹の歿年齢とその蔵書』、『京都市立西京高等学校研究紀要…人文科学』4

藤本孝一・万波寿子「2007」『山本家典籍目録—賀茂季鷹所持本—』、『京都市歴史資料館紀要』21

盛田帝子「1998」A「江戸和学史への一視点—荷田御風と賀茂季鷹—」、『雅俗』5

盛田（飯倉）帝子「1998」B「賀茂季鷹年譜稿」、『近世中後期歌壇史の研究…賀茂季鷹を中心に』（学位論文）

盛田帝子「1999」『賀茂季鷹の生いたちと諸大夫時代』、『語文研究』86・87

丸山季夫「1959」『三島自寛』、『文献』2

〔付記1〕和歌の引用は『新編国歌大観』により、『万葉集』は旧番号を用いた。

〔付記2〕資料の掲載をお許しいただいた京都市歴史資料館、宮内庁書陵部、東京大学総合図書館に御礼申し上げます。また、新美哲彦先生、荒川聡美氏より教示を受けた部分があります。御礼申し上げます。

〔付記3〕 本稿は、第四五回国際日本文学研究集会（国文学研究資料館主催、令和四（二〇二二）年五月）における口頭発表を基に一部論旨を修正したものである。